

要旨

藤山一樹（大阪大学大学院人文学研究科）

本報告は、戦間期イギリスの対独宥和を、主として近年公刊された研究に基づき再検討する。同政策は明らかな失敗のイメージで語られるのが一般的だが、学界においては実証分析の豊かな蓄積がある。史料公開が本格的に始まった 1960 年代末から、戦間期イギリスの政策決定者が直面した制約や、彼らの政策論理ならびに認識枠組みが、多くの歴史家によって解明されてきた。

本報告では、ナチ・ドイツへの宥和を推進したことで広く知られるネヴィル・チェンバレンの、あまり取り上げられないヨーロッパ構想を分析する。その際、彼の実兄で 1920 年代後半にイギリス外相を務めたオースティン・チェンバレンとの比較を試みたい。兄弟はともに対独宥和、すなわちドイツの要求に即してヴェルサイユ条約の修正を図った、戦間期イギリスの外交指導者であった。二人のチェンバレンが対独宥和の先に見据えていた〈ヨーロッパ〉とは、一体どのような姿だったのだろうか。